

終末期のがん患者らを専門に受け入れる鈴鹿医療科学大付属「桜の森病院」(鈴鹿市南玉垣町)が、緩和ケアの一つとして鍼灸を取り入れている。東洋医学も活用して症状を和らげるた

めで、緩和ケア専門病院での導入は全国的にも珍しいという。専門の大学教員が関わっており、大学側は教育現場への還元も見据える。(片山健生)

鍼灸で症状 少しでも緩和

鈴鹿医療科学大付終末期専門「桜の森病院」が導入



緩和ケアで鍼灸治療を施す王さん
— 鈴鹿市南玉垣町の桜の森病院で

大学側、実習先の一つへ見据える

今月中旬の午後、桜の森病院の一室。が進行して入院している八十代の女性がベッドでおおむけになり、中国出身の鍼灸師で同大助教の王桂鳳さん(五巴)が治療を始めた。もぐさ入りの箱で女性の腹部にきゅうを施した後、頭部などにはりを丁寧に刺している。

女性はがん患者に多い不眠や便秘に悩まされており、医療方針に関する院内協議で鍼灸を受けることが決まった。女性にとって、はりは人生初の体験。「痛くないですか」と尋

ねる王さんに「こんな気持ちの良いことがあるとは」と穏やかな表情で答え、「同じ悩みのある人も受けたら、どれだけ喜ぶか」と静かに語った。

この病院が鍼灸を導入したのは四月から。患者の中には、投薬主体では改善が難しい症状があり、東洋医学との併用で問題解決を図ることにした。学生への指導と並行し、同大付属「鍼灸治療センター」(同市岸岡町)で治療にも当たる王さんに協力を依頼。毎週月曜日の午後、一〜四人に対応している。

期待は大きい。患者は症状の進行に伴う痛みに対し、かばうような姿勢を取り続けるため、体のバランスを崩しやすい。「筋肉のこりや痛みは鍼灸で解消でき、モルヒネを必要以上に使わなくて済む」と、渡部秀樹院長(五巴)は利点を挙げる。

一方で、がん患者に、はりをを用いる難しさがある。総じてやせているため、効果的なつぼでも刺す場所によっては臓器に到達しかねない。冒頭の八十代女性患者に対し、王さんは、リスクの少ない頭頂部と両手首付近のつぼを見極め、処置していた。

「楽になったと一瞬でも感じてもらえたらうれしい」と、王さんはほほ笑む。その献身的な姿勢に「努力は天才に勝る」との褒め言葉を残して旅立った患者もいたといい、「鍼灸師として新しい経験を積ませてもらっている」と語る。

大学側は、この病院での取り組みを教育にも生かす考え。二〇二四年度から鍼灸サイエンス学科の実習先の一つとし、学生に治療時の補助や衛生管理を経験させる予定だ。

渡部院長は「鍼灸と緩和ケアでは患者が抱える悩みの質、量とも異なるが、患者に寄り添う重要性は同じ。その姿勢を養い、心の底から体現しようとする場合、この現場での経験は貴重」と話している。